Remarks on GE Xiang's "Introduction to *Zhuang Zi*"

In this paper we will attempt to investigate GE Xiang's "Introduction to *Zhuang Zi*". It would not be posible to expect to elucidate his thoughts, typical of Taoism in the Wei and Jin pericds, without making reference to it. Our aim is to make a contribution to the correct understanding of his thoughts as expressed in his "Introduction to *Zhuang Zi*". In particular, we will chiefly be concerned with the determination of its sources. We also will examine the usage of words used in it by checking it with the usage of words in his "Notes to *Zhuang Zi*", so that we will give an indirect answer to the question of the authenticity of "Introduction to *Zhuang Zi*" which has been at issue in recent years. (For my views of these questions, the reader is referred to his "On the Authenticity of GE Xiang's 'Introduction to *Zhuang Zi*' ", *Journal of the Society of Japanese Literature of Kyoto University of Education* 14.)

べきだろう。また、次の田子方篇の「故能離俗絶塵、而与物無不冥也」、及び胠篋篇の「而反冥物極」という郭象注と併せ考えると、「莊子序」の原文は、或は「返冥物極」になっていたのを、北宗の真宗の祥符四年に李宗諤らによって「莊子序」が校定されたとき（『玉海』巻四十五）、誤って脱したものであろうか。（北宋の陳景元・楊仲庚の『老子蔵室纂微篇』には「杳冥の極に参ず」という語がみえ、当時は「冥極」という語の名詞的用語法の方が一般的だったのかもしれない）もし「物極に返冥す」であれば、上句の「塵埃を去離す」と対をなし、文章も整うことになろう。

○〔田子方・郭注〕故能離俗絶塵、而與物無不冥也。○〔養生主・郭注〕冥極者、任其至分而無豪銖之加。

○〔徐無鬼〕冥有樞。〔郭注〕至理有極、但當冥之、則得其樞要也。○〔胠篋・郭注〕夫聖人者、誠能絶聖棄知、而反冥物極。物極各冥、則其迹利物之迹耳。

郭象自身の理想とする精神的境界でもあったのである。

39 ∧經崐崘涉太虛∨

＊知北遊篇の語をふまえる。高遠・玄妙なる世界に逍遥することをいう。

○〔知北遊〕若是者、外不觀乎宇宙、内不知乎太初。是以不過乎崑崙、不遊乎太虛。〔郭注〕若夫棄落天地、遊虛涉遠、以入乎冥冥者、不應而已。

40 ∧游惚怳之庭∨

＊「惚怳」は、「惚恍」と同じで、『老子』の語。道蔵本南華真経余事雑録に引く「莊子序」は、「惚恍」に作る。

○〔老子・十四〕其上不皦、其下不昧。繩繩不可名、復歸於無物。是謂無物之狀・無物之象。是謂惚恍。○〔老子・二十一〕道之爲物、惟恍惟惚。惚兮恍兮、其中有象。恍兮惚兮、其中有物。○〔庚桑楚・郭注〕故聖人以斯爲道、豈求無爲於怳惚之外哉。

41 ∧貪婪之人∨

○〔讓王・郭注〕此篇大意以起高讓遠退之風、故被其風者、雖貪冒之人、乘天衢、入紫庭、猶時慨然中路而歎、況其凡乎。

42 ∧進躁之士∨

＊41と共に、「衆皆競進以貪婪兮」（屈原・離騒）、「今以躁競之心、涉希靜之塗」（嵇康・養生論）などを参照。

○〔天下・郭注〕進躁無崖爲銳。

43 ∧曠然∨

＊「曠然無懷」（知北遊注他）「曠然無係」（田子方注）「曠然無矜」（田子方注）など、無碍の境地を形容する語として、郭象の常用するものである。

○〔知北遊・郭注〕知道之無不在、然後能曠然無懷、而遊彼無窮也。（他多出）

44 ∧忘形自得之懷∨

＊「忘形」（「忘身」）、「自得」とも、『莊子』中にしばしば見える語であるが、郭象はしばしばこれを併用して、心身ともに自在なことの意に用い『莊子』的聖人の解釈に充てている。

○〔讓王〕故養志者忘形、養形者忘利、致道者忘心矣。

○〔讓王〕審自得者、失之而不懼。○〔外物・郭注〕唯儻然無矜、遺形自得、道乃盡也。○〔逍遥遊・郭注〕夫體神居靈、而窮理極妙者、云云、遺身而自得。

45 ∧玩永年者∨

＊「永年」は、永遠の生命をいう。郭象の注にはみあたらないが、六朝期の文献には数多くみられる語。

○〔孔融、論盛孝章書〕若使憂能傷人、此子不得永年矣。

○〔何晏、景福殿賦〕鈞調中適、可以永年。

46 ∧綿邈清遐∨

＊「綿邈」、「清遐」ともに、俗塵を遠くはなれていること。多く精神的境界を表わすのに用いられるが、郭象の注にも次の如くみられる。

○〔大宗師・郭注〕緜邈深遠、莫見其門。○〔讓王・郭注〕夫志尚清遐、高風邈世、與夫貪利没命者、故有天地之降也。

47 ∧去離塵埃而返冥極∨

＊「返冥極」は、一般には「冥極に返る」と訓じられているが、郭象は、「冥」を〝物と一体になる〟（11参照）意に、また「極」を〝本性にそなわった分限〟（「物各有性、性各有極」―逍遥遊―）に用いていることからすれば、「返りて物に冥す」と読む

○〔外物・郭注〕其波蕩傷性、遂至於此。

34 ∧高風之所扇∨

＊郭象は「風」の語を、教（化）の意にしばしば用いている。「無爲之風」（馬蹄注）、「高讓遠退之風」（讓王注）など。

35 ∧弘其鄙∨

＊固陋な見識を広めてくれること。「鄙」は、「汝鄙人なり」（応帝王）・「樸鄙の心」（漁父）などの「鄙」と同じ。ただし、胠篋篇の「民朴鄙なり」は「樸素」（天道）・「純樸」（馬蹄）などと同義で、肯定的用法。

36 ∧解其懸∨

＊養生主篇・大宗師篇の「県解」の語にもとづく。「県解」は、向秀・郭象ともに、「係する所無し」と注す。つまり、執着心のないことをいう。

○〔養生主〕適來夫子時也、適去夫子順也。安時而處順、哀樂不能入也。古者謂是帝之縣解。〔郭注〕以有係者爲縣、則無係者縣解也。縣解而性命之情得矣。○〔大宗師〕安時而處順、哀樂不能入也。此古之所謂縣解也。〔釈文〕向云、縣解、無所係也。○〔田子方〕爲道者、解乎此。〔郭注〕所謂縣解也。

37 ∧灑落之功∨

＊「灑落」は、さっぱりと払い落とすこと。郭象の注の中には用例がみあたらない。

○〔潘岳・秋興賦〕庭樹槭以灑落兮、勁風戾而吹帷。

○〔江淹・雜體詩〕五難既灑落、超迹絶塵網。

38 ∧矜夸所以散∨

＊「矜夸」の語は「夸矜」と同じで、古く『史記』劉敬伝（「夸矜」）や班固の「東都賦」などにみえるが、郭象は天性を害い

調和を乱すものとして、荘子思想の解釈に頻用している。なお、郭象は、「夸」、「矜」、「夸矜」、「矜夸」の語を上位のものに、「跂」、「尚」、「跂尚」などを下位のものに、「夸跂」の語を同者を兼ねるものとして用いている。

○〔秋水・郭注〕將奔馳於勝負之竟、而助天民之矜夸、豈達乎莊生之旨哉。○〔寓言・郭注〕去其夸矜故也。○〔則陽〕榮辱立、則夸其所謂辱、而跨其所謂榮矣。奔馳乎夸跂之間、非病如何。

(六)故觀其書、超然自以爲、已當經崐崘涉太虛、而游惚怳之庭矣。雖復貪婪之人・進躁之士、暫而攬其餘芳、味其溢流、彷彿其音影、猶足曠然有忘形自得之懷。況探其遠情而玩永年者乎。遂綿邈清遐、去離塵埃而返冥極者也。

故に其の書を観れば、超然として自ら以為らく、已に当に崐崘を経て太虚を渉り、而して惚怳の庭に游ぶべしと。復た貪婪の人・進躁の士と雖ども、暫くも其の余芳を攬り、其の溢流を味わひ、其の音影を彷彿とすれば、猶ほ曠然として忘形自得の懐ひを有するに足る。況んや其の遠情を探りて、永年を玩ぶ者をや。遂に綿邈清遐、塵埃を去離して、反りて極に冥する者なり。

◇『莊子』の書を読み、その思想に触れることによって、人は自得の境界を味わうことができ、やがてはあらゆる塵雑を捨てて本来の自己に立ちかえることができることをのべる。

(五)と共に『莊子』の思想の社会に対する功用についてのべたのであるが、〝忘形自得〟、〝去離塵埃而返冥極〟などによって表わされる世界は、同時に、『莊子』を媒体として表出された

で、『老子』にも『莊子』にも多く用いられているが、次句の「神器云云」との関連からいえば、郭象はここでは『老子』二十八章、及び『莊子』馬蹄篇の文を意識していたのだろう。

○〔老子・五十二〕見小曰明、守柔曰強。用其光、復歸其明、無遺身殃。○〔老子・二十八〕常德乃足、復歸於樸。樸散則爲器。聖人用之、則爲官長。○〔馬蹄〕夫殘樸以爲器、工匠之罪也。

31 ∧神器獨化於玄冥之境∨

*「神器」とは、『老子』二十九章に「天下は神器なり」と用いられてから、天下国家を意味する語に用いられるのが普通であるが（班彪・王命論、陸機・五等論等）、郭象は達生篇の文をふまえながらも、一般化して、造化の霊妙なはたらきを受けてこの世に存在するもの、の意に用いているようである。

「独化」は、すべての存在の刻々の変化は、全くの自己原因的現象であって、これを変化せしめる何かがあるのではないこと。19の「自造」（〝自生〟）とともに、郭象の『莊子』解釈の特色をなす重要な概念を表わす語。

「玄冥」の語は、大宗師篇と秋水篇にみえ、25の「混芒」が未分化の状態（世界）をいう語であれば、これは無分明のさま（世界）をいう語と解せられる。

一句は、この世に存在するすべてのものは、なぜそうなるかという理由は全くわからないままに刻々に変化する、の意。

○〔老子・二十九〕天下神器、不可爲也。○〔達生〕以天合天、器之所以疑神者、其是與。〔秋水・郭注〕或者因欲有其身、而矜其能。所以逆其天機、而傷其神器也。○〔天下・郭注〕巧者有爲、以傷神器之自成。

○〔大宗師〕於謳聞之玄冥、玄冥聞之參寥。〔郭注〕玄冥者、所以名無而非無。○〔秋水〕始於玄冥、反於大通。○〔大宗師・郭注〕卓者、獨化之謂也。夫相因之功、莫若獨化之至也。故人之所因者、天也。天之所生者、獨化也。人皆以天爲父、故晝夜之變・寒暑之節、猶不敢惡、隨天安之。況乎卓爾獨化、至於玄冥之境、又安得而不任之哉。〔徐無鬼・郭注〕意盡形教、豈知我之獨化於玄冥之境哉。

32 ∧源流深長∨

*四部叢刊本札記、道蔵本注疏・余事雑録引、皆「源深流長」に作る。

○〔天運・郭注〕承百代之流、而會乎當今之變。

(五)故其長波之所蕩、高風之所扇、暢乎物宜、適乎民願、弘其鄙、解其懸。灑落之功未加、而矜夸所以散。

故にその長波の蕩く所、高風の扇る所、物の宜しきを暢べ、民の願ひに適ひ、其の鄙を弘め、其の懸を解く。灑落の功未だ加らずして、矜夸の散ずる所以なり。

◇莊子思想による教化の及ぶところ、物も人もあらゆる惑溺から解放されて、自得の境地に自らの生を謳歌することをのべる。

33 ∧長波之所蕩∨

*前句の「源流深長也」を承けた縁語的表現で、次句と同じく『莊子』の思想の影響するところ、の意。「流蕩」、「波蕩」などの語は、郭象の注では否定的に、悪い影響という意で用いられる場合が多いが、ここは肯定的に用いたもの。

25〈含哺而熙乎澹泊、鼓腹而遊乎混芒〉

＊馬蹄篇と繕性篇の語を結びつけたもの。「澹泊」は、「澹漠」、「澹薄」などと同じで、静かで清らかなさま。『莊子』の本文は、「澹漠」に作る。また、「混芒」は、未分化の状態をいう。四部叢刊札記、道蔵所収注疏、余事雑録引、皆「混茫」に作る。二句は、彼我の別なき世界に安らかな生を享受することをいうが、出典の文は、仮託された古代社会で無為自然の道が十全に行なわれたことを説くものである。

○〔馬蹄〕夫赫胥氏之時、民居不知所爲、行不知所之。含哺而熙、鼓腹而遊、民能以此矣。〔郭注〕此民之眞能也。○〔繕性〕古之人在混芒之中、與一世而得澹漠焉。○〔知北遊〕澹而靜乎、漠而清乎、調而閒乎。

26〈至人極乎無親〉

＊天運篇・庚桑楚篇の文にもとづく。「至人」は、「至仁」の誤りか。一句は、意識的な親愛の情をすてたところに、真の仁愛が約束されることをいう。

○〔天運〕請問至仁、莊子曰、至仁無親。〔郭注〕無親者、非薄惡之謂也。云云、故五親六族・賢愚遠近、不失分於天下者、理自然也、又奚取於有親哉。○〔庚桑楚〕故曰、至禮有不人、至義不物、至知不謀、至仁無親、至信辟金。〔郭注〕譬之五藏、未曾相親而仁已至也。

27〈孝慈終於兼忘〉

＊天運篇の文にもとづく。真の孝慈は、子が親の存在を忘れ、親が子の存在を忘れる状況の中でこそ期待されることをいう。『莊子』は更に進んで、自分が天下の人々を忘れるとともに、天下の人々に自分の存在を忘れしめることを最高の境地として説くが、「兼忘」の語は、その部分の説明に用いられたものである。

○〔天運〕故曰、以敬孝易、以愛孝難。以愛孝易、而忘親難。忘親易、使親忘我難。使親忘我易、兼忘天下難。兼忘天下易、使天下兼忘我難。〔郭注〕聖人在上、非有爲也、恣之使各自得而已耳。自得其爲、則衆務自適、羣生自足、天下安得不各自忘我哉。各自忘矣、主其安在乎。斯所謂兼忘也。

28〈禮樂復乎已能〉

＊典拠になった『莊子』の文を的確に指摘することはできないが、恐らく次の繕性篇の文であろう。一句は、礼楽制度は固定的に存在する一定したものではなく、各個の生得の能力にかなったところに具現さるべきものである、という意。

○〔繕性〕禮樂偏行、則天下亂矣。彼正而蒙己德、德則不冒。冒則物必失其性也。〔郭注〕以一體之所履、一志之所樂、行之天下、則一方得而萬方失也。各正性命而自蒙己德、則不以此冒彼也。若以此冒彼、安得不失其性哉。○〔馬蹄〕性情不離、安用禮樂。

29〈忠信發乎天光〉

＊庚桑楚篇の文にもとずく。「天光」とは、その人の本然の姿から発するかがやきをいう。郭象は「天」を、一貫して「自然の謂」として説く。

○〔庚桑楚〕宇泰定者、發乎天光。發乎天光者、人見其人。〔郭注〕夫德與泰然而定、則其所發者、天光耳、非人耀。

30〈用其光、則其朴自成〉

＊「用其光」は、前句の「天光」を承け、『老子』五十二章の語を用いて表現したもの。「朴」とは、生得のままの姿をいう語

○〔斉物論・郭注〕故造化者無主、而物各自造。物各自造而無所待焉、此天地之正也。○〔在宥・郭注〕夫莊老之所以屢稱無者、何故。明生物者無物、而物自生耳。○〔天地・郭注〕夫無不能生物、而云物得以生、乃所以明物生之自得。○〔知北遊・郭注〕明物物者無物、而物自物耳。云云、則爲之者誰乎哉。皆忽然而自爾也。（他多出）

20〈至至之道〉

○〔逍遙遊・郭注〕豈知至至者之不虧哉。

21〈泰然〉

＊庚桑楚篇の「宇泰らかに定まる者」に典拠をもつが、郭象はこの語を、心安らかに自得するさまの形容にしばしば用いている。

○〔庚桑楚〕宇泰定者、發乎天光。〔郭注〕夫德與泰然而定、則其所發者、天光耳。○〔庚桑楚・郭注〕此二者俱以泰然而自得之、非爲而得之也。（他多出）

22〈放〉

＊『莊子』本文には「天放」（馬蹄）の語がみえるが郭象も天性の自己を解放する意にしばしば用いている。

○〔馬蹄〕一而不黨、命曰天放。〔郭注〕放之而自一耳、非黨也。故謂之天放。〔大宗師・郭注〕知天人之所爲者皆自然也、則内放其身、而外冥於物、與衆玄同、任之而無不至矣。（他多出）

23〈放而不放〉

○〔天下〕獨與天地精神往來、而不敖倪於萬物。

四 故曰、不知義之所適、猖狂妄行、而蹈其大方。含哺而熙乎澹泊、鼓腹而遊乎混芒。至人極乎無親、孝慈終於兼忘、禮樂復乎己能、忠信發乎天光。用其光則其朴自成。是以神器獨化於玄冥之境、而源流深長也。

故に曰く、義の適う所を知らず、猖狂妄行して、其の大方を蹈む。哺を含みて澹泊を熙しみ、腹を鼓ちて混芒に遊ぶ。至人は親しむ無きに極まり、孝慈は兼ね忘るるに終り、礼楽は己れの能に復り、忠信は天光より発す、と。其の光を用うれば、則ち其の朴自ら成る。是を以て神器独り玄冥の境に化して、源流深長なり。

◇既成の価値観によって行動するのでなく、それぞれが自己の自然にしたがって自得しうる世界、そこでは仁とか孝慈とか礼楽とか忠信とかいったあらゆる価値が、無意識のうちに成就され、万物は暗黙のうちに自らの真実の生を送ることができる、という莊周の思想を、『莊子』本文を引用しながら解説する。

24〈不知義之所適、猖狂妄行、而蹈其大方〉

＊山木篇の語。「大方を蹈む」とは、「妄行」に対する縁語的表現であるが、郭象は、それが万物の調和をもたらすという前提のもとに、物それぞれが生得の自己にふさわしい生き方をすることとして説く。

○〔山木〕南越有邑焉。名爲建德之國。其民愚而朴、少私而寡欲、知作而不知藏、與而不求其報、不知義之所適、不知禮之所將、猖狂妄行、乃蹈乎大方。〔郭注〕各恣其本步、而人人自蹈其方、則萬方得矣、不亦大乎。

○〔徐無鬼〕大均緣之、大方體之。〔郭注〕體之使各得其分、則萬方俱得、所以爲大方。○〔天地篇・郭注〕猖狂忘（ママ）行、而自蹈大方也。

然れども莊生未だ之を体せざると雖ども、言は則ち至れり。天地の統に通じ、万物の性を序し、死生の変に達して、内聖外王の道を明らかにす。上は造物の無物なるを知り、下は有物の自ら造るを知るなり。其の言宏綽にして、其の旨玄妙なり。至至の道は、旨雅を融微し、泰然として放ならしめ、放にして敖らず。

◇莊子は無為自然の〝道〟を体得こそしていなかったが、世界をトータルに把捉し、時空の万象に対応する法を洞察し、万物は自己原因的に存在するものであるという認識のもとに、万物がその生得の性を完うすることこそ世界のあるべき姿であることを、広大かつ幽遠な筆致の中に見事に道破していることをのべる。

また郭象が、『莊子』の思想を「内聖外王の道」を明らかにしたものであるととらえていることは、老莊思想に経世的意義を積極的に見出そうとした表われで、注目に価するものであろう。

13〈然莊生雖未體之〉

＊1を参照。「之」は、無為自然の〝道〟をいう。

○〔知北遊〕夫體道者、天下君子所繫焉。〔郭注〕言體道者、人之宗主也。

14〈言則至矣〉

＊2を参照。

15〈通天地之統〉

＊天地を統括している道理―無為自然―に通暁していること。

○〔逍遙遊・郭注〕夫聖人之心、極兩儀之至會、窮萬物之妙數。

16〈序萬物之性〉

＊10を参照。郭象は、「物各〻性あり」、「性各〻分あり」という認識の上にたって、〝性に適い〟（逍遥遊注）〝分に安んずる〟（秋水注）ことこそ、現象的差殊を超克する道であると説く。

○〔逍遙遊・郭注〕然則體玄而極妙者、其所以會通萬物之性、而陶鑄天下之化、以成堯舜之名者、常以不爲爲之耳。

17〈達死生之變〉

＊11を参照。死生は、有限の個にとって、変化の中の最も大なるものである。

○〔齊物論〕死生無變於己、而況利害之端乎。○〔至樂〕死生爲晝夜。（他多出）。○〔逍遙遊・郭注〕御六氣之辯者、卽是遊變化之塗也。

18〈内聖外王之道〉

＊天下篇の語。内に聖人としての徳をもち、外には王者として君臨するための道。「内聖」は、自得の境界をいう、より老莊的な語であり、「外王」は、経世的実質をもつ、より儒家的な語である。この両者の矛盾なき融合こそ、郭象の『莊子』解釈の根幹をなす思弁であった。

○〔天下〕是以内聖外王之道、闇而不明、鬱而不發。天下之人、各爲其所欲焉、以自爲方、悲夫。百家往而不反、必不合矣。

19〈上知造物無物、下知有物之自造也〉

＊万物の生成を〝自生〟（何かによって作られるのでも、何かから生じてくるのでもなく、全くの自然のうちにその存在を始める）としてとらえるもので、「有の有たるは、無を恃みて生ず」（列子張湛注引、何晏『道論』）、「天下の万物は有より生じ、有は無より生ず」（老子第四十章、王弼注）と説く、何晏・王弼らの貴無論と対峙する思想である。

7〈夫心無爲、則隨感而應〉

＊4及び5の刻意篇の文参照。「感」とは、「無心」の状態の自己が、必然の理に感応することをいう。

○〔逍遙遊・郭注〕是以無心玄應、唯感之從。○〔人間世・郭注〕夫無心而應者、任彼耳。不強應耳。（他多出）

8〈應隨其時〉

○〔天運〕故禮義法度者、應時而變者也。〔郭注〕故當應時而變、然後皆適也。

9〈言唯謹爾〉

＊『論語・郷党』の語。言を否定し、「不言の教」（老子四十三章、荘子・徳充符篇など）を説くのは、もともと老荘的思弁であるが、このように『論語』の語を援用してのべているところに、儒道一体化を志向する一つの表われを認めることができる。

○〔論語・郷黨〕孔子於郷黨、恂恂如也、似不能言者。其在宗廟朝廷、便便言唯謹爾。

10〈故與化爲體〉

＊人間存在を規定する時間の流れ（変化）に無窮に対応するには、死生をはじめとするあらゆる変化に順応することをいう。『荘子』の「死生も已れに変無し」（斉物論）・「死生もまた大なり、而るにこれと変るを得ず」（徳充符）などの文より導かれた概念。

○〔大宗師〕古之眞人、不知説生、不知惡死。〔郭注〕與化爲體者也。○〔齊物論〕死生無變於己。〔郭注〕與變爲體、故死生若一。（他多出）

11〈而冥物〉

＊人間存在を規定する空間的事象（万物）に無限に対応するためには、彼我の別を忘れてあらゆる対象に冥合することをいう。10と共に、有限の個が、無窮、無限の時空に如何に処すべきかをのべるもので、郭象はこの両者を『荘子』解釈の二つの軸にすえている。「物に冥す」とは、『荘子』の「物に応じて無方」（知北遊）「物と委蛇す」（庚桑楚）「物と宛転す」（天下）などより導かれた概念であるが、郭象は「冥」という語を好んで用いており、後出の㉛の「玄冥」㊼の「冥極」や、「絶冥」（逍遙遊）（斉物論）「冥然」（養生主）などはその例である。

○〔逍遙遊・郭注〕夫唯與物冥而循大變者、爲能無待而常通。

○〔徳充符・郭注〕夫神全心具、則體與物冥、與物冥者、天下所不能遠。（他多出）

12〈豈曾設對獨遘、而游談乎方外哉〉

＊山林の遊びをよしとする、当時の道家者流に対する批判をのべたもの。「方外」は、大宗師篇の語。

○〔逍遙遊・郭注〕夫自任者對物、而順物者與物無對。○〔齊物論・郭注〕故無心者與物冥、而未嘗有對於天下也。

○〔大宗師〕孔子曰、彼遊方之外者也。而丘遊方之内者也。〔郭注〕夫理有至極、外内相冥。未有極遊外之致而不冥於内者也。未有能冥於内而不遊於外者也。○〔逍遙遊・郭注〕若乃崑然以獨高爲至、而不夷乎俗者、斯山谷之士、非無待者也。奚足以語至極而遊無窮哉。

㊐然莊生雖未體之、言則至矣。通天地之統、序萬物之性、達死生之變、而明内聖外王之道。上知造物無物、下知有物之自造也。其言宏絶、其旨玄妙。至至之道融微旨雅、泰然遣放、放而不敖。

＊知北遊篇の語をふまえる。「狂言」(ばかでかい話)とは、至言のこと。至言は世人の理解を越えているので、そういったもの。

○〔知北遊〕夫體道者、天下之君子所繫焉。今於道、秋豪之端萬分未得處一焉、而猶知藏其狂言而死。又況夫體道者乎。〔郭注〕自肩吾已下、皆以至言爲狂、而不信也。○〔逍遙遊〕肩吾問於連叔曰、吾聞言於接輿、大而無當、往而不反云云。吾以是狂而不信也。

3〈言雖無會〉

○〔徐無鬼・郭注〕古之言者、必於會同。

4〈寂然不動〉

＊『易、繫辭上』の語。「寂然」とは『老子』で〝道〟を「寂たり」と形容しているのをふまえたもので、あらゆる変化に対応できるエネルギーを秘めて静止している道の状態をいう。

○〔易、繫辭上〕易、無思也、無爲也、寂然不動、感而遂通天下故。○〔則陽・郭注〕若有纖介之慮、豈得寂然不動、應感無窮、以輔萬物之自然也。○〔人間世・郭注〕汝唯有寂然不言耳。

5〈不得已而後起〉

＊刻意篇の語であるが、『孟子・滕文公』の文を同時にふまえたもの。「不得已」は、『莊子』の他の篇にも多出するが、郭象はいずれも「必然の理」として説く。

○〔刻意〕故曰、聖人之生也天行、其死也物化云云。感而後應、迫而後動、不得已而後起。去知與故、循天之理。〔郭注〕任理而起、吾不得已也。○〔孟子・滕文公〕孟子曰、予豈好辯哉。予不得已也。○〔人間世〕一宅而寓於不得已、則幾矣。〔郭注〕不得已者、理之必然者也。○〔人間世〕且夫乘物以遊心、託不得已以養中、至矣。〔郭注〕任理之必然者、中庸之符全矣。〔大宗師〕崔乎、其不得已乎。〔郭注〕動靜行止、常居必然之極。(他多出)

6〈知無心者〉

＊1・7を参照。「無心」の語は、知北遊篇にみえるが、4の『易・繫辭』の「無思」と同義で、「機心」(天地)「成心」(斉物論)などとは対立する語。

○〔知北遊〕形若槁骸、心若死灰。眞其實知、不以故自持、媒媒晦晦、無心而不可與謀。彼何人哉。○〔應帝王、郭注〕夫無心而任乎自化者、應爲帝王也。(他多出)

(ニ)夫心無爲、則隨感而應。應隨其時、言唯謹爾。故與化爲體、流萬代而冥物。豈曾設對獨遘、而游談乎方外哉。此其所以不經而爲百家之冠也。

夫れ心無為なれば、則ち感に随ひて応ず。応じて其の時に随ひ、言は唯謹しむのみ。故に化と体と為り、万代に流れて物に冥す。豈に曽つて対を設けて独り遘ひ、而して方外に游談せんや。此れ其の不経にして百家の冠たる所以なり。

◇無為自然の〝道〟を体得した聖人とは、必然の理に感応して、時空の万象に対応する(変化と一体になり万物に冥合する)人物をいうのであって、世俗の外に孤高を気どる独善的人間とは同じくないことをのべる。

(一)と同じく、『易・繫辞』の「感じて遂に天下の故に通ず」と、刻意篇の「感じて後動く」とを結合させて儒道合一の聖人観を説くとともに、当時の道家者流の高踏的、厭世的態度を批判したもの。

郭象「莊子序」私箋

青木五郎

――魏晋期の玄学思想を代表する郭象の思想を究明するのに欠かすことのできない「莊子序」三百九十九字について疏証を試みることにする。疏証の方向は、主として「莊子序」の文章がふまえている典拠を明らかにすると共に、「莊子序」に用いられた語の用法を、やはり郭象の手になる「莊子注」の中に検証することに求めた。ともに「莊子序」の精確な理解に資することを目的とするが、後者については、近年「莊子序」の真偽をめぐってかわされている論争に、間接的ながらこたえんとするものである。なお、この問題に対する筆者の見解は、「『莊子』郭象序の真偽問題について」（京都教育大学国文学会誌第十四号）に一応示しておいたので、併せて参照されたい。

底本には、「続古逸叢書」本の「南華真経序」を用い、「四部叢刊」本及び「札記」、「道蔵」所収「南華真経注疏」及び「南華真経余事雑録」引「南華真経序」などによって校勘した。

(一)夫莊子者、可謂知本矣。故未始藏其狂言。言雖無會而獨應者也。夫應而非會、則雖當無用、言非物事、則雖高不行。與夫寂然不動、不得已而後起者、固有間矣。斯可謂知無心者也。

夫れ莊子は、本を知ると謂うべし。故に未だ始めより其の狂言を蔵さず。言は会する無しと雖ども、而も独り応ずる者なり。夫れ応じて会するに非ざれば、則ち当ると雖ども用ふる無し。言、物事に非ざれば、則ち高しと雖ども行なわれず。夫の寂然として動かず、已むを得ずして後起つ者と、固より間有り。斯れ無心を知る者と謂ふべきなり。

◇言葉による〝道〟の理解の限界を論じながら、言葉によって〝道〟を表現しようとした莊周を、〝本を知り〟、〝無心を知る〟ものとはいえても、〝道〟を体得した聖人には及ばないことをのべる。

無然自然の〝道〟は、言知によって把えられないことをいうとともに、『易・繋辞』の「寂然不動云云」の語を靱帯として、儒家思想と老莊思想の融合（老莊思想による儒家的聖人の解釈）を企図したもの。

1〈可謂知本矣云云〉

＊「本を知る」は、後文の「無心を知る」と同様〝道〟を観念的に理解しているだけで、11の「未だ之（道）を体し」ていないことをいう。

〇〔知北遊〕狂屈聞之、以黄帝爲知言。〔郭注〕明夫自然者、非言知之所得。（他多出）

2〈未始藏其狂言〉